



野に放たれた ラスカルたちの末裔

まつえい

1977年に放映されたテレビアニメ『あらいぐまラスカル』。フジテレビ系の「世界名作劇場」枠の3作目で、75年「フランダースの犬」、76年「母をたずねて三千里」に続いて放送された平均視聴率21%（全52回）の人気アニメであった。今でも、ラスカルの知名度、人気は高く、数多くのキャラクターグッズが売られている。



←那珂川町で撮影されたアライグマ（2009.2.6 下野新聞の掲載写真）

ところで、アニメ「あらいぐまラスカル」の原作は、スターリング・ノースの『はるかなるわがラスカル』（原題：RASCAL）で、1906年生まれのスターリングが、アメリカ北部のウィスコンシン州で過ごした11才からの1年間の経験をもとに書かれた実話なのである。

アニメでは、少年スターリングがある日、猟師が母親のアライグマを仕留める場面に遭遇するところから始まる。そのアライグマには、まだ目も開かない幼い子供がおり、スターリングはこれを**ラスカル(やんちゃ坊主)**と名付け大切に育てるのだ。ラスカルは、大きくなってくると、次第にアライグマとしての本性を表し、近所のトウモロコシ畑などを荒らしたりするようになる。スターリングはついにラスカルを森に返す決心をし、森の奥深くにカヌーで連れていく。そこで、野生のアライグマの声を聞いたラスカルは自ら岸に向かって泳ぎだし野に帰って行く、という話なのである。



↑小学館ライブラリー
(以上、「あらいぐまラスカルの部屋」<http://www1.harenet.ne.jp/~sato2000/rascal/rascal.html>を基に作成)

日本でのラスカル人気にもかかわらず、いや、人気者であったがゆえに、日本にやってきたアライグマは、程なく**大変な厄介者**として扱われることになる。ユーモラスな姿とエサを洗うという興味深い習性などとは裏腹に、成獣になる頃には、想像もつかないほど気性が荒くなるのだ。ペットとして飼われていたものが捨てられたり、逃げられたりしたものが野生化して増殖し、今や、全国に生息を広げている。近県では、**神奈川県、千葉県には数千匹**が生息するといわれている。農水産物の食害、人家への侵入、狂犬病などの衛生被害、文化財の損傷等、全国各地で悲鳴が上がっている。京都や鎌倉では、有名な神社仏閣の柱は、今やアライグマの爪痕で傷だらけなのである。



↑中身を食べられたスイカ

去る2月8日、栃木県立博物館で「**外来種による在来両生類への脅威と対策**」と題するシンポジウムが開催された。アライグマは、雑食性のため、農産物ばかりか産卵のために集まってきたカエルやサンショウウオなども根こそぎ食べてしまうという。県自然環境課によると、2007年12月と今年の1月に、佐野市の国道293号線（葛生と栃木の境界にある会沢トンネル付近）で、車にひかれた3匹の死体が見つかった。アライグマは、すでに佐野市にも侵入しているのである。



↑食いちぎられたサンショウウオ

野に放たれたアライグマの被害を食い止める対策は、アライグマを**生態系から隔離**すること、すなわち、ワナなどで捕獲して駆除する他はない。アライグマと人間との共存が困難であることを伝えていた『あらいぐまラスカル』（原作は格調高い名作です）。にもかかわらず、不用意に日本に持ち込んでしまった行為の代償はあまりにも大きいのである。